



お母さんの味

「花茶のチャレンジ」

わたしの人生の転機

「花茶」 小栗美恵

姉さんかぶりの手ぬぐいを
して、素足のまま鍬を持ち畑
に立っていた。

気の遠くなるような畑の畝
の長さにため息をつきながら、
時々バツクの姿勢になって草
取りに腰を屈める。

近所の人が、呆れ顔で眺め
ていたらしい。

思えば、二十歳はじめの可
愛い私でした。(笑)

農業が好きで結婚した訳で
は無かった。自分のパート
ナーとなる人の職業が農業
だったから、それだけ。

農家へ嫁ぐということの深
さも、そこからどんな生活が
始まるかも、全く考えなかつ
たし不安にも思わなかった。

退屈な人生は送りたいくない、
一生の仕事を持つている人と
結婚しようと思っていたが、

パートナーとなる人の職業が、
自分にも同じ一生の仕事にな
るとは思っていなかった。そこ
には「若さ」があったと思う。
何の思慮もなく、飛び込ん
だ農業と言う職業と農家とい
う暮らし。

でも、仕事がキツイとか汚
いとか思わなかったし、採り
たての新鮮な野菜の甘さに感
激して、驚くほどよく食べて
いた。ホクホクじゃが芋や南
瓜、そして豆類も果物も私の
大好物で、働いた後の一服や
三度の食事で摂る野菜たちは、
とつても美味しくてこんなも
のを食べられることを幸せだと
思った。

土や太陽や、風や自然の摂
理の中で働くこと、身体を使
いながら働くことは好きだつ
たし、その中で私なりの幸せ



小栗美恵(おぐり みえ)さん

高知県生まれ。

22歳で大阪万博で知り合った酪農家のご主人の故郷北海道に嫁ぐ。

平成2年にイチゴ狩り農園・ゆでトウモロコシ販売を始めた。

平成8年6月に地元の商材を使ったアイスクリームの店「花茶」をオープン(有)ファーム花茶は平成14年に登録)。

ホクレン夢大賞など数多くの農業賞を受賞。役職は北海道指導農業士、ケータリング美利香代表、女性農業者倶楽部(マンマのネットワーク)副会長など。

趣味は草木染め、機織りなど。

や生きがいを感じたり見出すと思っていました。

でも、そういう甘い気持は長く続かなかった。

いくら働いても無報酬という農家社会のあり方、それが当然という家族のあり方に不満がつのり、働くことが不満ではないのに生きがいを見出すことが中々出来ない私でした。

小遣いさえ無く、必要な程度、遠慮しながら親からもらう、どうして働いているのその見返りが無いのだろうと我が家の経営の内容も判らなかつた私は、不満でしかたなかつた。

夫に当たってみても、「農家は、こんなものだ。」隣の家さんも、買い物に行く時、親からお金をもらっている

た。」と、言う返事。

何とかしようとか言う気持ちもあまり感じられず、結婚して一人前の男のはずなのに、親からの小遣いで満足している農家の跡継ぎの姿勢にも、内心では不満でした。こんなモノかこれが当たり前と納得することが難しかったのです。

子供が成長するにつれ、この子供のためにも私はもっと自分というものを表現できる主体性を持った一人の人間として生きていかないとけないかと思うようになったのです。何かを見つけないければ、何か自分に自信が持てることを始めて経済力をつけなければ、いつまでたっても存在感の無い人間になってしまうと焦っていました。

何を始めたらいいか見当
がつかなかったけど、勧めら
れたこと、聴いたことは、進
んで興味の対象としました。
勧められて草木染もしまし
たし、機織もしてみました。

もしかしたら自己表現が出来
て、お金にも成りそれによつ
て、私を見出せるかもしれな
いと思ひ、努力もしてみたけ
ど、実用性だけでなくセンス
や芸術性を必要とし、又、手
仕事の根気のいる作業に経済
力をつけるまで出来るもので
ないと諦めて、趣味の域のも
のと諦めていきました。

でも、この時お世話になつ
た普及センターのMさんの影
響は生涯の私に影響を与えた
素晴らしい出会いでした。

“努力もしないで出来ない
とは言ふな”何事も真剣に取

り組んで、NOという結果を
安易に出さない姿勢、頑固
だったかもしれないけど、絶
対やり遂げるといふ姿勢をM
さんの後ろ姿から教え込まれ
ました。

その後、ダンボのように
なっていた私の耳とオツムか
ら伸びていたアンテナは、あ
る日「いちごを作らないか

い」というJA職員の一言を、
キヤッチしました。

JAから紹介された普及セ
ンターのMさんの熱意にも引
かれて、私のいちご人生がス
タートしたのは今から二十年
前のこと。本当に、昨日のこ
とのようだったのに、もう二
十年の歳月か感慨ひとしお
です。

晩夏の頃に植えた苗が一冬
の雪の重みを耐えて、可愛い
花を咲かせた時、なんと愛し
いのだろうと感動しました。
吾が子を育てるのと同じ思い
になつていちごを眺めている
自分にビックリしたけど、こ
の感動は農業と言う職業に就
いて、初めて味わうものでし
た。



虫を発見して心配して騒いで見たり、管理作業に腰が痛くてMさんを恨んでみたり、仕事は、楽ではなかったけど初めて作物を育てるという作業を実感し感動を覚えながら励みました。

Mさんの熱心さにも胸を打たれて、この人を裏切れないと思ひ、作業に勤しむ私でした。

一年目のいちご狩り農園は、思いの外大成功して、私は、初めて自分の手に大金を掴む事が出来たのです。家族も驚いて、少し協力的になつてくれました。

「私でも出来た。女の私でもいちご栽培が出来、大金を頂いた。」それは、地域の人達の驚きでもあつたようです。

「小栗さん家の嫁さんは、

何を始めるんだらう？あの畑で、何をやってるんだらう？」と、常に噂の種になっていたと、後から聞かされた。(笑)

普及員さんと共に、地域の女性に声をかけて、泉郷のいちご狩り観光農園がスタートしたのは平成四年頃だったと思います。

札幌から、苫小牧から、車が流れるようになって、村の人は環境を綺麗にしようと動き始めてくれました。営農の計画も、いちご狩りに併せて女性の意見が通るようになったし、大変な作業が加わったけれど、女

性は明るく元気になり自己主張ができるようになったと思います。

私は、もつとこの風景や農業のことを街の人達に知って欲しいし、泉郷に足を運んでほしいと思うようになっていました。

いちご狩りの後の花摘みや

とうもろこしの釜茹でなど始めて、街の人を呼ぶことを考えました。花畑のハーブをフレッシユハーブテイーに出した時、喜んでくれた都会の人達の笑顔が、嬉しかったのです。

こんなにいい農村風景があるから、もつとここを活用したい、いちご狩りに来た人からあと百円頂いて、収益を上げられることを考えようと模索が続きました。私のいちご狩り農園に足を運んで来てくれるのは、子供からお年寄り



まで幅広い層、この人達から無理なくサイフの口を開けて、

あと百円落としてくれるモノに、何があるだろうか？。たどり着いたのは、アイスクリームです。

「ほら、あそこの小さな黄色いお店よ」と、店の名前よりも存在を覚えてもらおうと思ふ気持で建てたのが、この黄色い店「花茶」。

他所のお店と同じ味じゃなくて、わざわざ来ても納得してもらえるアイスクリームを作ろうと食品加工センターに足を運びました。

「いちごアイスクリーム」だけは、誰にも負けない味にしたいと打ち込みました。随分たくさん試食してもらって、私のアイスクリームが誕生したのです。

市街化調整区域という厚い重たい壁もありました。

「時代の先を歩く人は、いつばい冷たい風や強い風を受けるけど、達成した時は、誰も味わつたことのない幸せや喜びを得られるよ」と、励ましてくれた元JAの参事。

「自分の育てた農産物に自分で付加価値を付けて売るということをこれからの時代は絶対必要なことだから大丈夫。いいことを考えついたらね」と、バックから応援してくれたMさん。

試作に共に四苦八苦しながらアイスクリームの完成まで協力してくれた普及センターの方々。

思い起こせば、色んなことがあつて、随分と色んな人達に助けられて、それは物資よ

りも気持ちを頂きながら今日になっていきます。

「千歳の顔になってきたよ。がんばつてね」と、言われる花茶が、今も黄色いままの店です。まさかと思う改築やスタッフを抱える今の私がいるのです。

都会に出ていた子供達が帰ってきて、一緒に働くようにもなりました。

気がついたら、私は、誰の意見でもなく自分の意思で意

見が言える強い女になつてい
たし、物事の見方にも出来るよ
うになつたのです。

良し悪しは別として、そんな私がいる。まだまだ、課題や思いは続くけど（きつと、永遠に）、ある程度の充実感を得られるようになりました。

多分、ザート、おばあちゃんになつても私はこの村を愛し、この店を愛し、行き交うお客様を眺めながら過していき
ると思つていきます。

